

話をしている場面だということは、一連の他の作で読める。三・二一以後の時間を話し合う二人の釣り好き男の小さなドラマ。

むらさきに煙る村ありリラの香をとかず小雨にロバがたたずみ
美帆シボ

今月は「ロバ祭」が行われるフランスの村の歌。「むらさきに煙る村あり」がうまい。なんとなく童話の村に迷い込んだような雰囲気を楽しめる。

フリーウェイを東へ 後ろに日が沈み斜め前から月昇り来る
木村俊介

前後左右すべて地平線、広大な平地の地平線までつづく道。大きな風景を大きくうたって魅力的。一連にラสบエガスの歌があるから、ネバダ砂漠の付近らしい。

人違いされいるらしき十五分楽しく卵どんぶりを食ぶ
細溝洋子

くすぐったい感じを我慢しながらの食事が楽しい、というのである。人間関係の歌としてなんとユニーク。読者は、人違いされるケースをあれこれ思い浮かべて楽しむことができる。子どもの同級生の母親とか、むかし勤務していた会社の同僚とか、妹の友だちとか……。

落ちる間に人生を二度振りかへるほどの高さよ塔のつてつべん
花美月

バンジージャンプの短歌をはじめて読んだ。今月の一連は、何をうたうか、そんな題材の珍しさも見どころ。いま、これから飛び降りる塔の上まで上ったところ。空

間的距離を時間で比喩した工夫も読みとりたい。

迂回路の坂道を行く夢が覚め眠れず眠らず春に迷う夜
中川弘子

図式的に解説すれば、何か困難な局面の解決策を見つけてそれを実行しはじめたところで、目がさめてしまった意味だろう。せつかく解決しそうだったのに、解決以前に夢からさめてしまったのである。現実は、重く辛い局面に立っているのだろう。それを、個人的な話題からとき放ち普遍的な題材となしえたのは、結句の軽快さである。

バス停の標識ついにバスを待つ風情を身につけはじむ 春雨
大谷ゆかり

「風情」という語をうまく使った作、と読む。『日本国語大辞典』には五種の意味が記載されている。ここでは以下の四つの意味があてはまる。けはい、しぐさ、態度、みだしなみ。さらにしげれば、けはい、みだしなみ、あたりが当てはまるだろう。短歌の読みとしては、「みだしなみ」が面白い。

雉子が鳴き 翡翠が飛ぶはつなつの道を歩いて学校に行く
田中拓也

通勤の歌だが、ラッシュアワーを押されながら電車でも通う人からすればまったくの別世界。現代という時間からも解放されて、明治時代でも大正時代でもいいような歌い方がなされている。そのため、現実から数センチ浮いた絵本の中の世界のように読める点を持ち味。